

令和元年6月4日現在

機関番号：33918

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K04717

研究課題名(和文) 介護観が介護実践に及ぼす影響 - 介護実践の構造化に向けて -

研究課題名(英文) Relationship between Practice of Care and KAIGOKAN among Care Workers - Practice of Care Structuration -

研究代表者

武田 啓子 (TAKEDA, Keiko)

日本福祉大学・健康科学部・教授

研究者番号：70548685

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は介護観と介護実践の関連を検討し、介護実践を構造化することであった。介護福祉士養成課程で学ぶ学生の介護観形成過程調査と介護職員の介護観と介護実践に関する質問紙調査を行い、以下の結果を得た。(1) 介護観形成プロセスでは介護実習での体験、学びが介護観形成に影響を及ぼしていることが示された。(2) 介護職員調査では、介護福祉士の約8割が介護観を意識しており、意識していない者より介護実践が高くなる傾向を示した。さらに、介護実践の4因子すべてに介護観の「考え・振り返る実践重視」因子が影響しており、介護実践の基盤となる介護観であることが示された。以上の知見をふまえて、介護実践の構造化を試みた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

介護実践は、対象者の状況に応じて適切に援助することを求められる学習であり、介護アセスメントの修得が重要な課題となる。本研究は介護観の形成プロセス、および介護観が介護実践に及ぼす影響を可視化し、介護実践の構造化を試みた。それにより、状況に応じた介護実践に向けた介護過程教育において介護観の重要性を明確にした意義は高い。さらに、介護実践の質的向上への波及効果も期待できる。

研究成果の概要(英文)：To determine the structure of care practice, we examined relationship between care practice and KAIGOKAN, "the most important thing for each person in caring (beliefs or value)". We conducted two surveys, one for university students in education course for certified care workers to examine nurture process of KAIGOKAN, and the other for care workers to clarify the relationship between their current KAIGOKAN and care practice. The results are as follows; (1) for the students, the care practice influences KAIGOKAN, and KAIGOKAN also influences care practice. (2) the rate of aware of KAIGOKAN for care workers, who learned in education course for certified, is 80%, and their care practice level is higher than that of care workers who unaware of KAIGOKAN. Furthermore "Reflection and Evaluation" factor in the KAIGOKAN was the correlated factor with care practice.

From these results, we propose our model for the structure of care practice.

研究分野：介護福祉

キーワード：介護観 介護実践

様式 C-19、F-19-1、Z-19、CK-19（共通）

1. 研究開始当初の背景

平成26年度「介護労働実態調査」（介護労働安定センター，2015）では，介護職員の離職率は16.5%と一般企業より高く，およそ6割が不足感を示している．厚生労働省（2015）の推計によると，2025年に必要とされる介護人材は253万人であり，それに対する介護人材の供給見込みは215万人と，38万人の人材が不足するとされている．また，介護サービスを運営する上で，良質な人材の確保の難しさが53.9%を占め，介護人材の質と量ともに深刻な状況である．厚生労働省は平成19年の「社会福祉士及び介護福祉士法」改正にて，介護福祉士の資質の向上を目指し「資格取得方法の一元化」を行うこととした．介護人材の量的確保が困難になるとの懸念から施行は延長された中，介護領域における唯一の国家資格である介護福祉士の在り方について，介護人材の中核的な役割を担う人材と位置づけ，介護全体の資質や社会的評価を左右するとしている．

介護は，対象者の状況に応じて適切に援助することを求められる学習である．そのため，状況に応じた適切な介護実践を計画（判断）する介護アセスメント，介護実践から評価・修正する一連の介護過程の展開が重要となる．つまり，適切な介護実践を計画（判断）するため，対象者の状況や環境，介護技術の科学的な根拠を理解する介護アセスメント能力を育むことが，質的向上には必要不可欠となる．厚生労働省は介護福祉士養成カリキュラムの基準と想定される教育内容の例として，生活を支援する際，ICF（International Classification of Functioning, Disability and Health；国際生活機能分類，2001）の視点に基づくアセスメントの活用を提示している．しかし，施設など介護現場におけるICFの活用度は低く，様々なアセスメントシート（日本介護福祉士会，1999；認知症介護研究・研修東京センター，2005）を活用している．加藤（2015）は介護実践に関わる介護過程の標準的な内容が構築されていないことを指摘し，その認識論的な構造を具体的に解明すべきと述べている．

看護的分野では，看護実践の構造として看護技術（基本技術），対象の理解（個別性），看護観（倫理を含む）など総合力および関連内容を構成要素としてあげている．それらを参考に，申請者らは平成22年度～24年度の科学研究費基盤研究C（一般）の成果として，介護アセスメントの構成要素となる生活支援技術（基本技術），対象の理解，および介護観を抽出した．そして，介護福祉士養成課程にて修得する生活支援技術（基本技術）84項目とその卒業時到達度を設定した．さらに，平成25年度～28年度の科学研究費基盤研究C（一般）では，介護過程の思考過程を生活支援技術（基本技術）に併用し，ICFの視点から対象を理解する生活支援技術の教育プログラムを考案した．介護観は個々の介護に対する価値観であり，認知科学的にとらえると，個人の信念に相当する深い意識のスキーマである．出来事に対して，感情や行動はこのスキーマに基づいて判断する（伊藤，2012）．そのため，介護実践を判断する際，この介護観は重要な構成要素であり，介護者が介護観を客観視することは，適切な支援を提供するために必要なスキルといえる．白石ら（2010）は介護職員の介護観として「考え，振り返る実践重視」など4因子を抽出し，教育・資格との関係がない，と介護観と教育・資格との関係を示す中，介護実践との関係を示していない．さらに，吉田ら（2015）は介護福祉士養成課程の学生の実習前後の介護観を分析し，年次が進むに従い介護観を構成する内容が多様になるなど介護専門職としての成長を述べる中，介護観形成の内容および形成過程で介護実践にどのように影響するのかについては報告していない．

そのため，本研究は介護観の形成プロセスおよび介護実践に及ぼす影響を可視化し，その体系化を目指す．介護観と介護実践の関係を明確にすることにより，介護過程における介護実践を構造化し，介護の質的向上を提案することが可能となる．

2. 研究の目的

本研究の目的は，介護観が介護実践に及ぼす影響を体系化し，介護実践を構造化することである．

3. 研究の方法

研究を進めるにあたり，介護観に関する文献検討をふまえて用語を定義する．次に，介護福祉士養成課程の学生を対象に，介護観の形成プロセスを検討する．また，介護職員を対象に介護観と介護実践の関係について，質問紙調査を実施する．以上の知見をふまえて，介護観が介護実践におよぼす影響を検討し，介護実践の構造モデルを試案する．

4. 研究成果

(1) 介護観の定義

介護観，看護観，援助観に関する文献を検討した結果，介護観は「介護する上で，自分が大切にしたいと思うこと（信念・価値に相当するレベル）」と定義した．

(2) 介護福祉士養成課程の学生の介護観形成プロセス

4年制大学の介護学生は，各学年の介護観の特徴から学内および実習施設での学びから影響を受けて，自己の介護観を段階的に育む様相が示された．それら介護観の形成プロセスを構造的に示した．この背景には，介護観を振り返り深める機会となる講義や介護実習，また相談援助実習を段階的に配置できる，W資格取得に向けたカリキュラム編成が影響していると言える．

また、2年制課程の1年生では「介護者」に関する記述が多く、2年生では「援助」「個別性」が増加しており、実習を通して介護実践の核となる介護過程を展開することで利用者主体の介護観が養われているプロセスが示された。以上より、4年制課程および2年制課程の学生は、就業年数は異なるが両者ともに介護実習での体験、学びが介護観形成に多大な影響を及ぼしていることを再確認できた。さらに、相談援助実習を体験することで、より介護観を深めるプロセスも確認できた。

(3) 介護観が介護実践に及ぼす影響

① 介護職員の介護観

介護職員の介護観について、白石ら(2010)の介護観10カテゴリーを分析枠組みとして質的に検討した。結果、10カテゴリーのうち「利用者の尊厳」「介護技術・知識・理論」「利用者と職員の距離・関係」の3カテゴリーがデータの7割以上を占めていることから、介護職員の3大介護観として示された。また、量的に因子構造を検討した結果、「考え、振り返る実践重視」「家族の意向・安全重視」「残存能力・機能重視」「組織内のルール・規範重視」となった。これら4因子は、種別ごとに介護観の因子構造が異なることが示された。

② 介護職員の介護実践

介護実践の項目として、厚生労働省(2017)が提示した「介護人材に求められる機能の明確化とキャリアパスの実現に向けて」を参考に、23項目を設定し4件法で測定した。介護福祉士養成課程を卒業した介護職員の勤務年数5年未満群と5年以上10年未満群では介護実践に大差はみられず、介護福祉士養成課程を卒業することにより、勤務年数5年未満の介護職員も介護実践力の基盤が育まれている様相を示した。因子構造は、「サービスマネジメント役割」「多職種連携役割」「指導者役割」「高度な介護実践者役割」の4因子であり、介護実践得点は勤務年数が長くなるにしたがって高くなることを示した。介護福祉士資格を持っていない介護職員では勤務年数によって介護実践得点に差が見られず、介護福祉士資格取得による介護実践力向上への関連が示唆された。さらに、介護老人保健施設の「多職種連携役割」「指導者役割」得点は特別養護老人ホームよりも高い傾向がみられ、介護観とともに介護実践による種別の影響も窺えた。

③ 介護観と介護実践の関連

介護観の「介護技術・知識・理論」を記載した者は介護実践得点が高く、介護観と介護実践の関連を示した。また、介護福祉士養成課程を卒業した介護職員のおよそ8割が介護観を意識しており、意識する者は介護実践が高くなる傾向を示した。介護実践の4因子すべてに介護観「考え・振り返る実践重視」因子が正の影響を及ぼしており、「考え・振り返る実践重視」は介護職員における介護実践の基盤となる介護観であることが示された。

また、介護学生の視点からとらえると、介護実習における介護実践を通して介護観を育み、形成することは明らかとなった。それとともに、介護実習における利用者や指導者との関わり、自己省察を通して形成された介護観を価値として介護実践に反映させるプロセスも示された。したがって、介護学生は介護実践を通して介護観を形成するとともに、その介護観を一つの価値として介護実践に反映する、介護観と介護実践は双方向に関連していることが示された。

(4) 介護実践の構造化

前述の知見を検討し、介護実践の構造モデルを提案した。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計9件)

- ① 高木直美, 板部美紀子, 久世淳子, 武田啓子: 介護福祉士養成施設2年課程の学生の持つ介護観-介護実習後の変化-. 専門学校紀要, 査読無, 17巻, 2019, 1-5
- ② 間瀬敬子, 久世淳子, 武田啓子, 水谷なおみ, 丹羽啓子, 藤原秀子: 学生の介護に対する考え方の変化-介護実習I・IIの影響-. FD (ファカルティデベロップメント) 推進を目指して, 査読無, 15号, 2019, 47-55
- ③ 久世淳子, 水谷なおみ, 藤原秀子, 丹羽啓子, 間瀬敬子, 高木直美, 武田啓子: 介護福祉士養成教育における介護実践-介護実習施設で働く介護職員の調査から考える-. FD (ファカルティデベロップメント) 推進を目指して, 査読無, 15号, 2019, 39-46
- ④ 武田啓子, 間瀬敬子, 藤原秀子, 丹羽啓子, 水谷なおみ, 久世淳子: 4年制大学で学ぶ介護学生の介護観形成プロセス. FD (ファカルティデベロップメント) 推進を目指して, 査読無, 14号, 2018, 43-47
- ⑤ 丹羽啓子, 久世淳子, 武田啓子, 水谷なおみ, 間瀬敬子, 藤原秀子: 相談援助実習履修学生にみられる援助観の特徴-介護学専攻学生を対象とした調査結果をもとに-. 社会福祉実習教育研究センター年報, 査読無, 15号, 2018, 47-53
- ⑥ 藤原秀子, 武田啓子, 水谷なおみ, 久世淳子, 丹羽啓子, 間瀬敬子: 介護総合実習履修前における学生の介護に対する考え方. 日本福祉大学健康科学論集, 査読無, 21巻, 2018, 53-59

https://nfu.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=3021&item_no=1&page_id=4&block_id=73

- ⑦ 間瀬敬子, 久世淳子, 武田啓子, 丹羽啓子, 水谷なおみ, 藤原秀子: 4年制大学で学ぶ介護学生への介護に対する考え方の変化-入学後半年間の学び-. 日本福祉大学健康科学論集, 査読無, 21巻, 2018, 45-51
https://nfu.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=3020&item_no=1&page_id=4&block_id=73
- ⑧ 武田啓子, 久世淳子, 水谷なおみ, 藤原秀子, 丹羽啓子, 間瀬敬子, 高木直美: 介護観意識度が介護実践におよぼす影響-介護福祉士養成課程を卒業した介護職員を対象として-. 地域ケアリング, 査読無, 20巻5号, 2018, 66-68
- ⑨ 武田啓子, 久世淳子, 藤原秀子, 水谷なおみ, 丹羽啓子, 間瀬敬子, 高木直美: 介護職員の介護実践に関する研究 - 介護福祉士養成課程を卒業した介護福祉士の勤務年数による比較-. 厚生の指標, 査読有, 65巻15号, 2018, 24-29

[学会発表] (計8件)

- ① 久世淳子, 藤原秀子, 水谷なおみ, 丹羽啓子, 間瀬敬子, 武田啓子: 介護職員の介護観に関する研究-自由記述と介護観尺度, および介護実践との関連-. 日本発達心理学会第30回大会, 2019.
- ② 武田啓子, 久世淳子, 水谷なおみ, 藤原秀子, 丹羽啓子, 間瀬敬子, 高木直美: 介護職員の介護観意識度と介護実践に関する研究. 第26回日本介護福祉学会大会, 2018.
- ③ 水谷なおみ, 武田啓子, 丹羽啓子, 藤原秀子, 間瀬敬子: 介護学生の介護観に関する研究-資格取得時の到達目標に基づく検討-. 第25回日本介護福祉教育学会, 2018.
- ④ 久世淳子, 武田啓子, 丹羽啓子, 藤原秀子, 間瀬敬子, 水谷なおみ, 高木直美, 板部美紀子: 介護職員の介護実践に関する研究-勤務年数との関係-. 第23回日本在宅ケア学会学術集会, 2018.
- ⑤ 久世淳子, 武田啓子, 丹羽啓子, 藤原秀子, 間瀬敬子, 水谷なおみ, 高木直美, 板部美紀子: 介護職員の介護観の構造に関する研究. 日本健康心理学会第31回大会, 2018.
- ⑥ 水谷なおみ, 武田啓子, 藤原秀子, 丹羽啓子, 間瀬敬子: 4年制大学における介護観形成過程に関する研究. 第24回日本介護福祉教育学会, 2018.
- ⑦ 久世淳子, 間瀬敬子, 藤原秀子, 水谷なおみ, 丹羽啓子, 武田啓子: 介護福祉士養成課程で学ぶ大学生の介護観-自伝的記憶の観点から-. 日本発達心理学会29回大会, 2018.
- ⑧ 間瀬敬子, 武田啓子, 水谷なおみ, 藤原秀子: 4年制大学で学ぶ介護学生の介護に対する考え方の変化-入学後半年間の授業の影響-. 第25回日本介護福祉学会大会, 2017.

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名: 久世 淳子

ローマ字氏名: (KUZE, junko)

所属研究機関名: 日本福祉大学

部局名: 健康科学部

職名: 教授

研究者番号 (8桁): 50221221

研究分担者氏名: 水谷 なおみ

ローマ字氏名: (MIZUTANI, naomi)

所属研究機関名: 日本福祉大学

部局名: 健康科学部

職名: 准教授

研究者番号 (8桁): 20515605

研究分担者氏名: 丹羽 啓子

ローマ字氏名: (NIWA, keiko)

所属研究機関名: 日本福祉大学

部局名: 健康科学部

職名: 准教授

研究者番号 (8桁): 10331646

研究分担者氏名： 藤原 秀子
ローマ字氏名：(FUJIWARA, hideko)
所属研究機関名：日本福祉大学
部局名：健康科学部
職名： 助教
研究者番号 (8 桁)：10516909

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。